

その6・瀬谷区阿久和地区

1 阿久和地区の概要―ゆるやかな開発の進んだ住宅地

阿久和地区は瀬谷区の南東に位置し、旭区泉区に接した地区で、三ツ境、二ツ橋町の一部、宮沢町、阿久和町からなっている。

この阿久和地区は次のような特徴的なエリアに分かれる。三ツ境、二ツ橋町は、三ツ境駅、瀬谷区役所、瀬谷警察署などが位置する区の中心部であり昭和三十年代から市営三ツ境住宅の建設や民間開発などが始まり、商業住宅の混在した地域である。阿久和北部は、昭和四十年代から大小の民間開発が行われ、新旧住民の混在した住宅地であり、宮沢町はやはり四十年代に開発が進行した住宅地であるが、和泉川沿いに樹林や農地が多く残っている。阿久和南部は、五十年代後半に、県営阿久和団地の建設が行われたが、まとまった農地や山林などの緑が多く、半分以上は市街化調整区域となっている。

いわば、地区全体は、三ツ境駅周辺から南部へ順次ゆるやかな開発が進んだ住宅地であり、民間の宅地開発による整った住宅地もあるが、ミニ開発の戸建てやマンション、賃貸アパートなどが雑然とした町並みを形成しているところも多い。また、農業、造園業も多く、酪農がいまだに営まれているところもある。

主な地域施設(平成五年六〜九月調査時点) 旧四点セット：二ツ橋在宅支援センター、瀬谷地区センター(地区外)、瀬谷中央公園こどもログハウス(地区外・調査中に開園)、いずみ台公園こどもログハウス(地区外)、下瀬谷小学校コミュニティスクール(地区外)

公共施設 瀬谷区役所、公会堂

教育施設 小学校(三ツ境、原、阿久和) 中学校(原)

公園 長屋門公園

町内会館 谷戸自治会館等二十一の会館(整備率三八%)

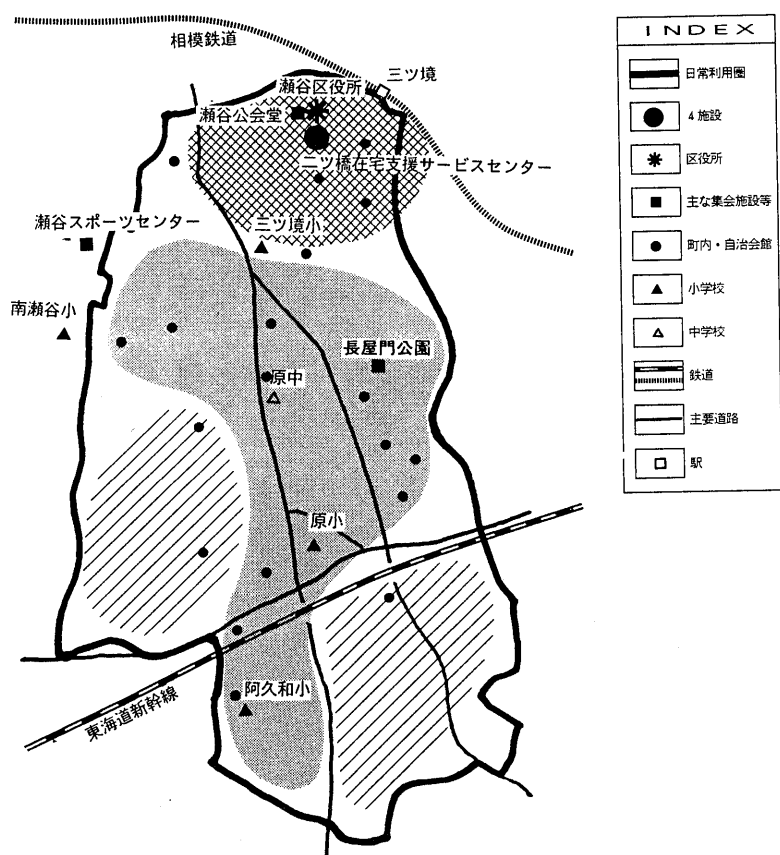
建設予定

阿久和南部、新幹線南側に、地区センターおよび在宅支援サービスセンターが建設予定。また、原中学校の近くに市営住宅が建設中でこの集会所は地域開放の予定。

る。

地区の交通網は瀬谷区の縦軸となる県道瀬谷柏尾線と県道阿久和鎌倉線が縦断しており、横軸は新幹線に平行して県道鴨居上飯田線がとおっている。最寄り駅は、三ツ境、宮沢町、阿久和北部は、徒歩、自転車、バス等で相鉄線三ツ境を、阿久和南部の県営阿久和団地で

図一 地域施設分布図



はバスで相鉄線いずみ野駅を利用している。人口は四万二千五百三十六人、世帯数一万四千二百三十九世帯(いずれも平成四年度)である。昭和六十三年と比べると、人口、世帯数とも増え続けている。(二十一頁の表参照) 高齢化率は、七・八%である。

- 1 阿久和地区の概要
- 2 地域の課題
- 3 住民組織・住民活動の特徴
- 4 地域活動と施設ニーズ
- 5 住民と区役所

2 地域の課題

① 交通問題

最も多くあげられたのは交通問題である。交通量が多い割に道路が狭い。騒音、振動問題、東西への動線がない、などである。

② ごみの不法投棄

南部の調整区域では雑木林、河川敷への冷蔵庫、洗濯機などの大型ゴミの不法投棄がみられ、環境を悪化させている。

③ 市民利用施設の不足

自治会・町内会館の整備率は三八%と六地区の中で最も低い。この地区は、まとまった公共用地が少なく、したがって、市民利用施設の整備も遅れている。

④ 大型店進出に伴う商店街の営業問題

三ツ境周辺に大型店が進出し、小売店の営業問題が深刻になっている。

3 住民組織、住民活動の特徴

① 町内会・自治会の性格―世代交代した地元住民と新住民から構成

ほぼ阿久和南北、三ツ境、宮沢の四連自治会（二ツ橋町の一部は瀬谷第四地区連自治会のエリアである）からなり、四連合はそれぞれ十一、十四、十、二十一計五十六の単位自治会からなる。加入率は九割程度。連合町内会長は、五十代と六十代の男性四人。そのうち二人は何代も続く地元農家の出身、他

の二人は、昭和四十年代に入居した市民で、定年退職した元サラリーマン。在職年数は八年から十数年で、西区藤棚地区と比べるとかなり新しい。

新しいマンションでは、自治会に加入しないところや役員の手が無く、くじ引きのところ、交替制のところなどもある。しかし、反面、昭和四十年代に開発されたある分譲地の町内会では、サラリーマンが一斉に退職したため、男性を中心としたバーベキューパーティなど、親睦的な動きが活発化した、ということであり、町内会には多様な動きが見られる。

連合自治会と地区社会福祉協議会との関係では、阿久和南北では会長が同じであるため、予算も合体し、老人給食活動、デイケアなど動きも柔軟で活発だが、他の二地区は別々であるためか（これは行政指導）、動きにくいということである。

② 自主的な活動グループ

⑦ たまり場活動

保健・福祉系では、阿久和南部の「どんぐりの会」が特徴的である。妊婦、子育て期の母親、痴呆性の高齢者、心を病んでいる人達の「たまり場」を月一回開いている。区の福祉課の働きかけがきっかけとなり、区の社会福祉協議会、保健所とNさん（雇用促進事業団阿久和住宅の自治会婦人部長、保健指導員、もと民生委員でもある）の協力で九年続いている。Nさんは、九州の炭鉱閉山により四十三歳で横浜の雇用促進事業団の阿久和住宅に入居した。炭鉱時代の相互扶助は、横浜での民

生委員の働きを上回るものであったという。さらに、団地にラオス難民を受け入れた経験などが現在の活動にいかされている。

この活動は団地の集会所を利用し、室内でのゲートボール大会、人形劇と豚汁パーティなど月一回のペースで子供や老人の喜ぶメニューを用意する。Nさんの手先の器用さがものをいう。阿久和北部でも、谷戸自治会館でデイケアが行われており、これも年齢、障害を問わずだれでも参加できる。このような地域デイケアは、区内に八カ所あり、区社会福祉協議会の在宅福祉活動費で行われている瀬谷独自の活動である。また、老人給食会も地区社協を中心に民生委員、ボランティアの協力で実施されている。特に、阿久和南北の合同の老人給食会は、民生委員のみが携わっているのが特徴で、二カ月に一度、百人以上の参加者（ひとり暮らし老人、昼間ひとり暮らしも含む）がある。

④ 子育てグループ

この地区にも子育てグループが四つあるが、「ポコアポコ」（少しづつという意味）は、ある母親が知り合いがいなかったため、保健所に問い合わせることから始まった自主的な会である。当初、0歳児から四歳児までの子ども母親が集まり、月二回午前中活動している十人程度の会であったが、三年目を迎えた現在では、三十八人の大所帯となった。最近のマンション、アパートの建設で若い子供が増え、保健婦からの紹介で参加者が増えたという。母親たちにとっては、しつけの悩みなど相談相手ができることで、育児の孤立感、ストレスを解消できる。また、子供には友達ができ

ヒアリング対象者

区役所関係：瀬区役所区政推進課、市民課、保健所保健婦、建築課
自治会・町内会関係：阿久和南北、宮沢、三ツ境の四地区の連合町内会長

各種の地域活動：民生委員兼精神作業所ボランティア、阿久和団地自治会副会長兼民生委員、老人クラブ兼谷戸シルバー、野鳥の会会員兼瀬谷区歴史を知る会兼区民会議運営委員、町内会婦人部（農協婦人部）兼このは塾会員、自治会婦人部長兼民生委員兼地域作業所ボランティア

自主的活動：野鳥の会会員兼長屋門ボランティア、子育てグループポコアポコ、リサイクルショップ玉手箱、ファイバーリサイクルネットワーク瀬谷地区連絡会、学習グループくわの実学級、どんぐりの会（地域デイケア）

施設関連：二ツ橋在宅支援サービスセンター、長屋門公園自然体験ゾーン事務局長（民生委員、きさらぎ会、春秋会、このは塾、神奈川女性会議、瀬谷区民会議副代表）

る、とすること子育てグループのニーズは、この地区にとってもかなり高い。

活動場所は阿久和第2公園、谷戸自治会館、消防署の体育館などであるが、気軽に利用できる所、母親だけが落ち着いて集まれるところがほしい、ということだ。

資金面は、会費二百円、区の社会教育係から十萬円の運営委託費、区の社協の助成金など計十七萬円で活動している。保健所の「養育ネットワーク」の事業としてリーダー研修をうけたり、保健婦さんの歯磨き指導など、保健所とのかかわりは強い。

④生涯学習のグループ「きさらぎ会」が母体となつて様々の学習グループが

中学校区内のPTA活動のグループが母体となつた「きさらぎ会」が十五年続いている。この会は、現在長屋門の自然体験ゾーンの事務局長であるSさんを初めとして当時の女性PTA役員が始めたもので、発足当初は区民が学習する機会としてさまざまな分野の講座を設けた。そして、それらの講座の受講者を中心に新たなグループづくりをし、さらに学習機会を増やしていった。

女性問題、教育問題、自治の問題、環境の問題、高齢者問題等々のグループに分かれ、教育問題は「学習グループくわの実学級」、環境は「瀬谷の緑を育てる会」として、活動を続けている。高齢者問題は「春秋会」が誕生し、それぞれ活動を続けている。

くわの実学級は九年目を迎えている。当初子供が小・中学生のころは、登校拒否、いじめなどをテーマに勉強会をしていたが、子供が成人した現在は、「私の生き方を確かめた

い」をテーマに自分たちの人生を考える参考となる講演会を開催している。

「瀬谷の緑を育てる会」の活動は、自然の大切さ、素晴らしさを多くの区民とともに、目で肌で共感することを目的とし、そのための様々な活動を展開している。主に、活動場所は瀬谷市民の森で、四季折々の自然観察を子供から高齢者まで楽しみながら行っている。春は草餅づくり、夏は隣接している谷戸でのホテルをみる会（現在、事情があつてホテルは飛ばず）、秋はかかしづくりコンテスト、森の芸術祭コンサート、冬はやまいも大会等々。

「春秋会」は、平均年齢七十歳というほとんど男性の学習グループである。毎年テーマを決め、一般区民にも呼びかけ学習をしてきた。が、生涯学習の委託金が切れた現在では、代表者がもっと気楽な会にと、「おたっしやクラブ」と名を改め、自分たちでできるボランティア活動をしていく、という方向で動き始めている。

この地域の生涯学習のグループの活動は、Sさんがきっかけをつくって生み出され、Sさんを中心としたネットワークをもって動いているのが特徴である。

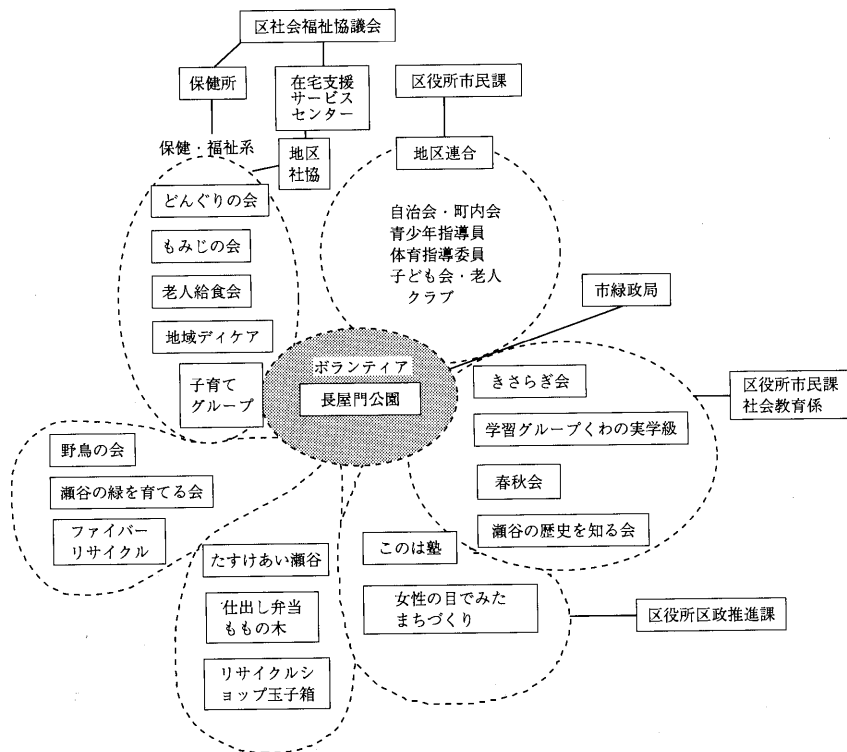
⑤生活クラブの支援によるコミュニティ事業
生活クラブの活動も活発である。ワーカーズコレクティブにより借り上げられた三ツ境商店街のビルの一角に、リサイクルショップ「玉手箱」、仕出し弁当屋「ももの木」が営業し、奥の事務室には在宅ケア・家事サービス「たすけあいせや」が開設されたばかりである。これらは、営利を目的としたものではない

く、生活クラブの援助を受けて、自主的な活動が事業体にもまで発展したいわばコミュニティ事業として位置づけられよう。

⑥リサイクル活動も活発

瀬谷区ファイバーリサイクル地区連絡会も発足したところである。ファイバーリサイクルとは、古紙、古着の回収をおこなない、キロ十五円で業者が回収し、細かく手で分け、その三割は東南アジアや中国へ輸出し、三割は機械を拭くウエスに、三割は反毛にする、という事業である。行き場のなくなった古着（施設の寄付は飽和状態）を生ごみと一緒に

図一 阿久和地区の活動ネットワーク（長屋門を中心として）



捨てない、というリサイクルの考えの下に、採算ベースに乗せるが、営利目的ではない事業である。この活動は市の環境保全基金の助成も受けている。回収は年四回、回収場所には個人の家や町内会館、消防団の詰め所などがなっているが、公共の施設を利用してほしい、という要望がある。

その点、長屋門公園は、常時受け付けているので回収率は抜群に高くなっている。

④ 住民の相互関係

これらの自主的活動は、いずれも四、五十代の女性を中心に行っており、相互によく知り合いである。自主的活動と共に、民生委員、保健指導員、町内会の婦人部、子供会活動などの経験もち、あるいは同時に行っている市民が多いのがこの地区の特徴である。したがって、この地区では、地元農家の旧住民と昭和四十年代に入居した住民層は、地区社協の活動等を通し、相互に協力しあい、ゆるやかなまとまりを保っている。

P T A活動をきっかけとして、さまざまな分野の地域活動を展開し、長いキャリアを積み上げて来たSさんには、連合町内会長も一目おき、この地域の運営のキーパーソンとなっている。

4 地域活動と施設ニーズ

① 主な地域施設の利用状況

・自治会館整備率：二十一／五十六で三八％
 ・他の地区と比べ最も低い。旧四点セットは、二ツ橋在宅支援サービスセンターのみである。

表一 長屋門の自主事業（6～9月）

6/3・10	刺繍手芸教室
6/7・14・28	とう編み教室
6/12～6/30	蔵ギャラリーにて「仏像彫刻小林昇山作品展」
6/21	和紙人形教室
7/1・8	刺繍手芸教室
7/3	七夕飾り
7/4	七夕コンサート
7/10	1周年記念講演と映画の夕べ(長屋門監製映画上映)
7/18	和紙人形教室
7/25	阿久和北部青指共済オリエンテーリング
7/28	田舎一泊体験
7/28	〃
7/31	長屋門寺子屋第1回
8/2・3	田舎一泊体験
8/5・12	刺繍手芸教室
8/15	すいとん大会
8/28	子どもとう教室
8/28	長屋門寺子屋第2回
9/1～9/16	蔵ギャラリーにて「本田廣子手作りネクタイ展」
9/2・9	刺繍手芸教室
9/11	くわの実生涯教育学級第1回
9/13・15	手作りネクタイ教室
9/18～10/21	蔵ギャラリーにて「領家詠子刺繍絵展」
9/20	和紙人形教室
9/22	とう編み教室
9/23	くわの実生涯教育学級第2回
9/25	長屋門寺子屋第3回
9/29	手芸教室「葡萄柄バック」
9/29	葡萄の刺繍バック講習会

・自治会館―どこもフル回転で利用されており、他地区にも貸し出している。とくに谷戸自治会館は、新しく設備もしっかりしており、老人給食会、地域デイケア、子育てグループ、さまざまなサークル活動、健康診断の会場など七〇八割は埋まっている。

・自治会館以外では阿久和南は農協の会議室、消防の詰め所、地域作業所などが利用されている。宮沢町では神明神社の神楽殿(住民はここを「公民館」と呼び、老人給食もできるように改築した)。三ツ境では、大規模な集会所はまこと幼稚園の講堂などが使われている。公的な市民利用施設の極めて少ないこの地区では、既存の様々の施設を自ら改築し活用している。

◆二ツ橋在宅支援サービスセンター―市内で最初のセンターである。もともと、区役所の裏手の老人憩いの家の改築計画のあるところに、同センターの構想が立てられた、といういきさつがある。このセンターは市の民生局

から市の社会福祉協議会が運営委託を受けている。

建物の構造は、厨房が狭く、老人給食に使用できない、入浴サービスもやりづらい。また、老人憩いの家当時の囲碁将棋グループにとっては、コーナーが狭すぎて使いにくい、など、施設全般の使い勝手はよくないということである。センター設計の段階で利用者の意見を聞く必要性が高いようだ。

運営面では、予約制を取らざるをえないこと、構造上、地域活動グループの道具置き場が取れないこと、またデイサービスでは預かり要件と地域ニーズとの間にギャップがあること、など様々の問題を抱えている。

第一館目のセンターであり、反省点も多いが、運営上の工夫を行い、地域のヒアリングでは職員の対応は親切で評判がよく、老人にとっては気持ちの上で支えとなっている。

・瀬谷地区センター(地区外)は遠すぎて行きづらい、バスの便もない。

ティータイム―長屋門公園事務局長

施設を作るプロセスが大事だ、と思う。利用者や関心のある市民に対し、どのような目的の施設か、どのような運営をするのかを説明し、市民の意見を聞きながら、それを設計に生かして行く、そういう中で市民の施設に対する愛着も生まれてくる。長屋門公園は、そのようなヒアリングを丁寧に行ってきた施設だ。一方、地区センターの建設委員会は、意見を言っても、実際の施設設計に生かそうという姿勢よりも、行政側の防衛的な姿勢が目立った。建設委員会のもち方、役割をもう一度考え直してほしい。

長屋門公園



・下瀬谷小学校のコミュニティ・スクール

(地区外)は知らない人が多い。

・子どもログハウス(地区外)については木のぬくもりがあってよいという評判と、子供を家に閉じ込めるのはよくないという意見の両方があった。この地区からは、泉区のログハウスに行く人が多いようだ。

◆長屋門公園―地域活動のネットワークの拠点―

この地区の特色を最も良く表している施設である。

当初、大岡家の長屋門のみが残っていた所へ、泉区から古民家を移築し、背後に雑木林や小川アメニティを造り地区公園とした緑政局西部公園緑地事務所管理の施設である。

この施設は建設の段階から、地域の住民に意見を聞き、たとえば、野鳥のための街灯の高さ、道のつけかたなどが設計に反映されている。このことにより、住民の施設への愛着を呼び起こし、雑木林の管理をするボランティア、薪割りのボランティアなど、さまざまな形で地域住民が運営にかかわることになった。また、地域で長い間活動のキャリアを積んだSさんが長屋門公園の事務局長として運営を任されたことで、さらに、地域に根づいた施設となっている。

地域の文化活動サークルの発表の場であり、文化行事の主催などの拠点施設であり、あらゆる分野の地域活動のネットワークの拠点となっている。事務所には四六時中地域住民が顔を出している(地区連合町内会長はじめ、生涯学習グループ、ファイバーリサイクル、子育てグループ、老人会、生活クラブの活動

者たち)。

また、長屋門と古民家の風景そのものが、落ち着いた雰囲気醸し出し、ふらりと散策に訪れる人も多い。

②施設ニーズ

・連合町内会長―子供から老人まで気軽に集まり、煮炊き出来る自治会館の大きいもの、中学校区に一箇所ぐらい。

連合の会議の場、物置(みこし、テント、ポール、ゼッケンなどの置き場、六畳ぐらいの大きさ)・地域デイケア―介護者もふくめ五十人ほど集まれるゆったりした座敷がほしい。

・地域作業所、学童保育所―専用施設ニーズ

5―住民と区役所

区役所の市民課が連合町内会の事務局的役割を果たしているのはこの区役所でも同様である。連合町内会長は、頻りに区役所に顔をだし、年間百回以上にもおよぶ会合が招集されている、という。いわば、地域の運営に係ることは、連合町内会に相談され決定される、というシステムとなっている。

一方、実際の地域の活動部隊は、四、五十代の女性を中心で、例えば、「たまり場」活動は保健婦や区の社会福祉協議会の職員のMさんと市民のNさんという固有名詞のかかわりですすめられている。

生涯学習のグループはSさんを中心に展開しているが、区役所の市民課とのかわりには、職員により異なるところがあり、ヒアリングの時点ではあまりなかった。

いわば、自主的な活動は、システムよりは、職員と市民の固有名詞の関係で進んでいる。

また、個々のセクションと自主的活動とのかわりはあるものの、区役所内部で地域の情報相互に交換し、地域コミュニティの、キメ細かい情報を把握している訳ではない。

①「このは塾」の活動と区役所

区役所の調整係が実施している「水と緑と文化のまちづくり調査」の一環として、市民のまちづくりへの関心を高めることを目的とした「このは塾」が開催されている。以前市の都市計画局都市デザイン室の地域展開型事業で行われた「女性の目でみた瀬谷区のまちづくり」に集まったメンバーや、区役所の声かけによって集まったまちづくりに関心のある市民が中心となり、区内を散策しながら、マップを作っていく活動である。

「このは塾通信」が発行され、イベントも企画されるなかで、参加人数も増え、まちへの関心も広まり、さまざまなグループができてきている。行政の呼び水の事業から生まれた市民グループであるが、いくつかの自主的な活動グループとして独立し、区役所は、現在では交流会、情報交換会の場所の提供のみというかわりである。

このように、区役所の介在で市民の活動が生まれ、活性化し、市民相互のネットワークが広がって行くことにより、地域コミュニティと区役所の新しいかわりが生まれ、また、地域コミュニティの自立的な力も強まる。区役所の新しい仕事のスタイルとして注目される。ハヒアリング、文章 中川久美子

ティータイム―区民会議経験者

まちづくりを考える時、区民会議は必要だと思う。ただし、行政のすること、住民組織のすることの整理が必要。現在は、住民側の苦情、行政の説明をそれぞれ聞いている、という感じだが、住民同士がキャッチボールできるような形が望ましいのではないかと。司会の仕方によっては、可能だと思う。また、メンバーも、特定のメンバーの集まりではない方向にかえていくことが必要だ。

行政の委嘱委員も自治会・町内会を通して選んでいるが、公募性にしてみてはどうか。

